

ても良いかなあとと思う、今日このごろの気持ちである。

咸興からの引揚者は、北朝鮮全域からの引揚者の中ではまだまだ恵まれていたのか？　と思われたことがある。それは私の母校、端川国民学校の教師であつた佐藤礼子先生の「北朝鮮は遙かに」と題する著書を読んでからで、端川では二百人の邦人の脱出を認める代わりに、日本人女性二十人を北朝鮮保安隊に差し出すように命令されたとのこと。端川に住んだことのある私たちにとっては、胸を切り裂かれる思いを今もしている。

「もう二度と戦争しないで！」

平和に過ごしたい。これが心からの願いです」

波濤を越えて

—豆満江より—

静岡県 船戸捷壽

はじめに

昭和二十一（一九四六）年に引き揚げてから、六十余年が過ぎようとしています。一家四人が家を捨て、着の身着のまま逃げて来て、生き残った私の手元には父の古ぼけた小さな手帳だけが、私の生まれ故郷、朝鮮咸鏡北道慶興を示す唯一のものです。当時、六歳で幼かった私の北朝鮮の思い出は、鍋底に残ったわずかなご飯粒のようなものだが、この文はかすかに繋がっている糸を頼りに記したものです。

一 私の生い立ち

私は終戦時六歳、朝鮮咸鏡北道慶興で旅館を営んでいた父巖壽、母そのゑの末っ子として昭和十四年二月六日に生まれました。私の上には男二人、

女三人の兄妹がいましたが、長男と次女が幼くして亡くなりましたので、実際は四人きょうだいでした。姉二人と兄は東京の祖父、関口康壽の家に預けられて学校に通っていましたので、慶興には祖父清助と両親、そして私の四人で暮らしていました。幸子姉の言によれば、私が生まれたころは祖母も元気で、母が長いこと病床にあったので、祖母が母代わりになって私にミルクを作ったり、乳の出ない自分の乳房を含ませたりしてくれたそうです。

昭和二十年四月、生徒数は十人にも満たない慶興小学校に入学。友達は朝鮮人の子と何人かの日本人の子たちでした。旅館の手伝いや、私のお守りの少女などは朝鮮人だったので、小さいときから朝鮮語は結構達者にしゃべっていたようです。

二 楽しかった慶興

慶興は、北朝鮮北端の北緯四十二度から四十三度付近に位置し、札幌や帯広と同じ緯度上で、そこは朝鮮半島の付け根の所で、中国、ソ連、そし

て北朝鮮の三カ国が交わる国境でした。

慶興を流れる大きな川は豆満江といい、白頭山を源にして日本海に注ぎ、東シナ海に流れるのが鴨緑江です。対岸は満州で、少し下るとソ連沿海州で河口までそう遠くなく、慶興から日本海側には雄基を越えて羅津、そして新潟港と結ぶ清津港、清津は咸鏡北道の最大の都市でした。

慶興は畑作が主で、甜菜や玉蜀黍の作物のほか米もできました。また、八目鰻の特産地として有名で、鰻の肝油をとる工場もあり、近くの阿吾地には鉸山があり、朝鮮人造石油(株)の工場もありました。八目鰻の蒲焼、手作りの塩鮭やイクラは母の自慢料理で、父が豆満江の支流の川で鮎を籠いっばいに釣つてくると、母がそれで甘露煮を作りました。母の作る鮎の甘露煮は、長野出身の祖母が船戸旅館の名物にした料理で、それも祖母譲りのおいしいものでした。ことごとと低温で長い時間をかけて煮ていたことを、今でもよく覚えていきます。

豆満江は西峰台という小高い山の所で大きく山を回るようにして蛇行し、厳冬には完全に氷結しますが、夏期にはよく氾濫を起こしていたようです。私が生まれる前の年も氾濫して、妊娠していた母は水につかり、それが元で難産し、出産後三カ月ぐらい入院していたとのことでした。

船戸旅館は、阿吾地の灰岩洞に支店があつて、そのときには両親だけがそこにいて、洪水に遭つて家も流されたとのことでした。

豆満江は、山を回るようにしてあちこちで蛇行しているので砂地の河原が広く、ところどころには池ができていました。夏には浜梨はまなしが自生していて、子供たちは砂山から滑り降りては浜梨の赤い実を食べました。浜梨の実は、甘酸っぱくおいしいものでした。女の子は、それを糸に通してネックレスにしたりして遊びました。砂丘の間にできた池には、大人の拳ほどもある大きな田螺たにしがとれました。祖父がたくさんとつて来ました。

川から西峰台に向かつては、家々が道の両側に

立ち並んでいて、記憶では左側に朝鮮人の家々、右側には日本人の家があつたと思いますが、いずれにせよ山は緑豊かな風景であつたことを覚えています。

娯楽施設の何も無い辺境の地では、西峰台や豆満江の河原や砂山は、大人にとつても子供にとつても唯一の憩いの場であつたのです。大人は、西峰台の裏山に花摘みや山菜取りに行っていました。

三 船戸旅館について

洋の東西では戦争が始まりましたが、慶興の我が家では平和を謳歌していました。祖父や父は、その他に田畑を買い求めて、未来の夢を慶興に託していたのです。

祖父の清助は岐阜阜の山奥、美濃村の農家、船戸家の長男でしたが、昭和の初めごろ一旗揚げようとこの地に渡り、その後どのような事情からかよく知りませんが、船戸旅館を建てました。そして父、関口巖壽を婿養子に迎え、力を合わせて船戸旅館の発展に尽くし、私が物心のつくころにはも

う隠居の身になっていました。船戸旅館の主なお客は、軍人や警察関係の人が多く、父は毎晩のように宴席で酒の相手をしていたような記憶があります。私もお客の軍人さんたちにかわいがられて、当時、既に内地では容易に手に入らない羊かんやキヤラメルをよくもらったものです。

昭和十九年だったか、それとも二十年の春だったか忘れてしまいましたが、母に連れられて初めて東京に行ったことがありました。上越線の「小千谷」という駅名を、お粥の「おじや」みたいだと思ったり、省線電車は走り出すとすぐ停まってしまうとか、電車内が混んでいて大人の足元に隠れるようにしていた私を、一人の乗客ががっしりした腕で肩より高く差し上げてくれたことなど、初めての内地への旅行の記憶は鮮明に残っています。幸子姉にその話をすると、姉も小学校三年生のときに父に連れられて上京した際に、同じような体験をしたと話していました。

当時は、既に内地では食料品などは配給制でし

たので、まだ平和で豊かな北朝鮮の生活の中から、毎月のように塩鮭、鱈子、八目鰻の干物、それに肝油、木炭を詰めた冬のキジ、現地ではノロと言っていた鹿肉の塩漬けなどを送っていました。それもいつからか途中で中身を抜き取られたり、遂には荷物も手紙も届かなくなってきたという話もありました。

内地では配給制度、南方の戦線では劣勢という情勢になっていても、祖父や両親たちは日本の勝利を信じて疑うことはなかったようです。間もなく敗戦国の避難民になるなどということは夢にも知らずに、母と私は慶興に帰りました。

平穏な慶興でしたが、日常生活の変化が徐々に表れてきました。毎晩一緒に寝るほどかわいがっていた犬が徴用されたり、貴金属を献納したりなどで、敗戦の兆しが忍び寄っていました。まだまだ気が付きませんでした。

筆筒の上にあるラジオから流れる「大本営発表」のニュースを聞いていた父が、ふと漏らしたひと

言、「なんかおかしいな！」と言う言葉が、妙に私の耳に残ったのもこのころのことでした。勇ましい軍歌が変わったのか、戦況報告がいつもと違うのか、私には分かりませんでした。父の咳きは大きなショックでした。

四 祖父の無念

昭和二十年八月九日は、満州に在住している人たち、内地での原爆にさらされていた方々はもとよりのこと、多くの日本人にとって悲しい日でしたが、私たち家族やここ慶興に住んでいた日本人たちにも、忘れられない日となりました。

早朝、突然の砲撃に真夏の夢を破られ、日本人への避難命令、それも重大な命令ではなく、ちょっと山に避難していれば事態は収まりそうなどという感じのものでした。だから家族は、みんな着の身着のままでした。トラックに乗せられて山に入りましたが、日暮れになっても家に戻れず、そのうちに味方が敵か判然としない飛行機が頭上に襲って来ました。サーチライトの光芒と焼夷弾の炸

裂による火炎とが交錯し、真昼のように明るくなった中を、兵隊さんたちが駆けずり回っていました。

夜明けになると、なぜかトラックは私たち民間人を残して、兵隊さんだけに乗せて走り去りました。私たちには信じられないことでした。「なぜ！」。遠ざかって行くトラックの荷台が今でも目に焼きついていきます。子供だった私の幼い心の中でも、兵隊さんは私たちを守ってくれる強い人なのだという気持ちを強く持っていたので、余計に口惜しさでいっぱいでした。後で母から聞いた話では、兵隊から一緒に北方に行くよう誘われたが、祖父や父は多くの同胞を残して我々だけここから出て行くような理不尽なことは、と言って断つたとのことでした。

何人ぐらいがそこに残されていたかは分かりませんが、それからはただ山中を歩くのみでした。とにかく阿吾地か上三峰か、会寧かまたは茂山か、いずれかの駅を目指してただひたすら歩き続けま

した。我が家の中で一番参っていたのは、祖父でした。平穩だった日々には毎晩、晩酌をしながら孫たちの成長を楽しみにしていた人です。それが、何の前触れもなく一夜にして家・財産を失い、大事な物を何一つ持ち出せず、心にも肉体にも耐え難いショックを受けたままの逃避行となってしまったのです。むろん、六歳の私が、そのときの祖父や両親の気持ちを理解するすべはありませんが、父や祖父の年齢になった今、あの当時の無念の気持ちを感じることができません。

絶望の中を、ただただ歩くだけでした。最初に到着した駅の構内で、祖父はどうとう力が尽きてしまいました。薙に巻かれた祖父の遺体が横たわっていました。私を目の中に入れても痛くないほどかわいがってくれた祖父、疲労と絶望の果てに、心身共にボロボロになっていたのです。今でも忘れられない光景です。後に、母から「おじいちゃん、分かる所に埋めてある」と聞きましたが、多分上三峰の駅では、と想像しています。祖父が

死んだのは九月十日です。避難開始から一カ月が経っているのですから、かなり歩いたことになります。私の記憶では、歩き始めてから二、三日後に亡くなったような気がしています。

五 母の底力

駅に着いても列車には乗れず、徒歩での避難は続き、やつと町に入りました。今思うと、多分茂山だったと思います。その町で、どこからともなく「日本が負けた」という声が伝わってきました。それと同時に警察関係者の人やいろいろと恨みをかっていた人たちが、朝鮮人によって連れ去られたというわさが、子供の私の耳にも入ってきました。その日は特に暑く、道路は日差しの反射で白く乾いていました。北朝鮮特有の蒸し暑い日でした。

それから徒歩での逃避行は続きました。山の道や谷を歩いていて歩けなくなると、おんぶしてくれるのはいつも母でした。母は私の手を引き、私を抱いていたのでした。小柄な母のどこにそんな

な力があつたのでしょうか？ 恐らく、父は身心とも憔悴しきつていて、一行に付いて歩くだけで精いっぱいだったのでしょうか。母は、夫を励まし私をかばって、ただいちずに生き抜く道を探していたのです。

子供の私には、どこを、どの町を歩いたか鮮明に記憶していませんが、「もう歩けないよ！」と言って、さぞ両親を困らせたことと思います。歩き疲れて、清冽せいれつな川に足を入れて冷やしたときの、あの気持ちのよかつたこと。そして、その後また歩き始めると、前以上に足のだるさが増していることを感じて、あまり水につかると余計に疲れることを、体験的に会得したものでした。

山の高地を走る線路沿いに歩き、高架の鉄橋を列車が向かって来るのを恐れながら渡ったり、ソ連兵の強盗まがいの行為に、女の人たちはわざと顔を墨を塗って汚したり、ときには泥濘の地に伏して身を隠したりして、ひたすら大きな駅を目指しました。

ある駅にやっと到着すると、そこには避難民が大勢集結していて、代表者がいろいろと交渉していたのでしょうか、そこから列車に乗ることができました。ただ、乗れたのは有蓋貨車の屋根の上で、貨車の中には軍馬が繋がれていました。トンネルに入ると、大きな荷物は振り落とされましたが、私たちは暗闇と黒煙の中で屋根にしがみつき、ひたすら頭を低くしてトンネルを出るまで我慢するのです。なぜか子供心には恐怖も感じずに、むしろ冒険心の方がたくましく、楽しくさえ感じていました。

途中のある駅からは無蓋車に乗り換えさせられ、やっと周囲の景色などを見る余裕ができました。列車はのろのろとゆっくり走り、暑い太陽の陽を受けてキラキラ光る海を左手に眺めながら、随分と長い時間乗っていたような気がしていました。やっと大きな駅に到着しました。後で知ったことは、そこは咸鏡南道の道庁所在地、咸興でした。咸興駅で降ろされて、公園かグランドのような所

に收容されました。天幕に入れられて、難民收容所での生活が始まりました。便所は、グランドの周囲に穴を掘り板を渡しただけの簡易便所で、男女共用でした。

六 父の死

季節は、そろそろ朝夕に寒気が加わる九月下旬になっていたと思います。收容所の衛生状態は相対的に悪くなっていて、一番恐れられていた発疹チフスと再帰熱が流行し始めました。着の身着のままの状態で、何日も入浴ができなかったので、みんなは蚤と虱だらけの体になっていました。我が家では、最初に父が発疹チフスにかかりました。そのために、私たち家族は、その收容所から、以前日本人が住んでいた咸興市内のある一軒家に移りました。先住者は危険を察知して、既に内地に脱出していて、家は空き家になっていました。国境近くにいた私たちより後方にいた人たちが、日本の劣勢をよく分かっていたようです。

父はもう一人では動けませんでした。何人かの

人に助けてもらいながらの生活が始まりましたが、寝たきりになった父は薬もなく、薄いお粥だけで病状は悪くなるばかりでした。父の排泄物は便所には捨てられないので、紙にまるめて狭い庭に捨てるしか方法はありませんでした。

昭和二十年十月十日、父は何も言わずに静かに死んでいきました。父の枕元で母と私が父を挟んで座り、母が父にハンカチーフをそっと掛けて、号泣していました。私は、涙が溢れそうになる眼を必死に見開いて、泣くのを我慢していました。志半ばの無念な思いのまま、父は四十九歳の生涯を異郷の咸興で、母と六歳の私だけに看取られて、その一生を終えました。その日は、船戸旅館が完全に消えて無くなった日でもありました。

父の埋葬は、まったく簡単なものでした。小高くて草木一つ無いはげ山が埋葬地で、そのはげ山は咸興の郊外にあつて、遺体を入れるための穴が、山上から傾斜面に沿って段々状に長く掘られてありました。父の死後六十年が経過した最近、その

山は盤竜山であったことが分かりました。山の斜面に何段あったのでしょうか？ 山全体が、日本人避難民の墓場でした。父の埋葬場所は中腹付近で、そこから咸興市街が一望できたことを、おぼろげながら記憶しています。穴の深さは、二、三メートルぐらいで、莖に包まれた遺体を滑り落として穴に入れ、土はかけませんでした。土をかける意味は当時の私には理解できませんでしたが、母は分かっていたと思います。その後の話で、このはげ山に埋葬された死者は、三千人から六千人と言われています。

二カ月前までは、父は船戸旅館の当主であり、慶興の日本人社会のリーダーの一人でした。母の悔しき、悲しき、絶望感はいかばかりだったことだろうと思うのです。それでも母は、私に向って恨み言も言わず、以前と変わらない優しい母でした。

七 慶興での難民生活

父を失い、母と二人だけの難民生活となりました。

た。毎日の食事は、何を食べていたか記憶がありません。確かお粥のようなものを食べていたように思います。母は、父の看病で疲れ体力が弱っていて、とうとう父と同じ発疹チフスに感染してしまい、熱と下痢に悩まされていました。やがて私も同じ症状になり、二人とも倒れました。二人は数日間、寝たままになり、便所にもはっていくような状態でしたが、そのうちに何とか回復しました。薬もないのに二人が自力回復できた要因は、発疹チフスに対する免疫力ができていたことと、畳のある暖かい部屋で療養ができたからだと思います。

興南や富坪の一般収容所にいた避難民の人々は、それぞれの収容所の衛生環境は劣悪で、とても人間が生活できるものではなく、多くの人が発病し、厳冬を越すことができずに亡くなったということです。

通貨の切り替えで、母がわずかに持っていた円は価値が無くなってしまったので、働くことを考

えなければならなくなり、母は、タバコを紙に巻いて売ることになりました。その原料と道具を仕入れて、所持金は十円ぐらいいしかなかったようです。

母は「最後のお金ね!」と言って、私に慶興の旅館に来ていた軍医さんが度々持つて来てくれた、森永キヤラメルを買ってくれました。無一文から始めた手作りの紙巻タバコの行商でしたが、母は常に明るく優しく働き、食べるものも思うように買えないという悲壮感は、私には見せませんでした。そんな母に、私は甘えてばかりいました。

旅館の女将だった母が、タバコの行商をしても少しの弱音も吐かなかった底には、私を連れて東京にいる子供たちに絶対に会いたいという、強い強い信念があったからと思います。

そんな母に幸運がやってきました。ある日、例のとおり行商に行った母は、朝鮮人の経営する大きな旅館の主人から、その旅館に子供と一緒に住み込んで働くことを勧められたのです。北朝鮮の厳しい寒さのこの冬を、どうして過ごすかを心配

していた私たち親子にとつては、まさに救世主のような人でした。その人は、母の旅館仕事の経験や堪能な朝鮮語、そして一番に母の性格などを見込んでいたようです。

お陰で私たち母子は、その日から温かい部屋と十分な食事を保証されて、昭和二十年の冬を無事に越すことができました。思い起こせば、八月九日からの二カ月間の間、あつという間に祖父と父を亡くし、絶体絶命のピンチに立っていましたが、そんな状況の中においても母には強い運がありました。

その旅館は、咸興の中心の大通りに面していて、筋違いの通りにはソ連軍の本営となった建物がありました。裏の道を駅の方に向かうと、市場があったと思います。その市場の中でいつとき、日本人の子供たちのために臨時の学校が開かれています。私も何日か通ったことを記憶しています。旅館に来たソ連兵から、蜂蜜を塗った黒パンをもらったり、黒光りしたマンドリン銃（ソ連兵の携

行する自動小銃の名)に触ったりしていました。終戦までは軍歌を歌ったり、山本五十六元帥に憧れたりして軍帽をかぶって遊んでいたのに、咸興に来てからは、そんなことはすっかり忘れていました。

母は良き働き手でした。旅館の主人夫妻はとても喜び、私たちにとても良くしてくれました。東京は全滅したそうだから、もう日本には帰らずに、このままここにいなさいと言っていました。母は東京にいる子供の安否を、自分の目で確かめたいと強く思っていたそうです。ある夜には、祖父が夢枕に現れて「日本に帰りなさい。子供たちの所に帰りなさい！」と言ったそうです。この話をするたびに、母は涙をためていました。

八 脱出決行

やがて昭和二十一年の春がきて、北朝鮮からの脱出の機会がめぐってきました。旅館の主人達の後押しもあり、母と私は引揚団の一員として、咸興から三十八度線を南下する脱出計画を決めまし

た。その計画は二通りあって、一つは陸から徒歩で、もう一つは海路を使うというものでしたが、私たちは海から一気に南朝鮮に向かうことに決めました。当時、咸興周辺には何千人という避難民がいたようですが、多くの人たちは陸からの道をとりましたが、結果的には老人や幼い子供、そして孤児になった子供たちが険しい山河を越え、厳しい監視の眼を逃れての悲惨な逃避行を強いられていたようです。

咸興はソ連軍の監視下にあり、夜間は外出禁止になっていたので、脱出は容易ではなく、夜の暗闇を利用するしかありません。そして、海を渡るには船を買収しなければいけないので、何人かの人たちがお金を出し合いました。その際も、旅館の主人が援助してくれました。

脱出の日、寝惚け眼のまま荷車のようなものに乗し、体を隠して港に着きました。港には、何隻かの漁船が帆を下ろしたままもやっていたようです。私たちに割り当てられた船は木造の小さな漁

船でした。帆は一枚で、船頭も一人でした。乗るとすぐに出航し、沖合に出ました。最初は順調でした。乗船者は三十人ぐらいで、皆船底に横たわりました。私が横になるスペースがありませんでしたが、そのうちに、船底の板から海水がにじみ出てきました。板子一枚下は地獄です。私は母の体の上に乗って眠りました。蒸し暑くて息苦しくなると、私は舟の舳先へ行き横板につかまり、襲いかかる波を見て、自分があたかも波の中で泳いでいるような感覚になって、時を忘れていました。大波に翻弄されている感覚は、風邪で高熱が出たときにもよくありますが、このときの経験がトラウマになったようです。舳先は、波の底にすべりおりとまた頂上へと持ち上がり、波頭の向こうに黒い山並みが見えました。やがて風が全くなくなり、波はおとなしくなり、舟は同じ場所をぐるぐる回っていました。一枚の帆掛け船でしたので、風がなくなると前に進みません。一週間ぐらい、暑い日差しの中で海に漂っていたの

ではなかったかと思えます。

ある日、真上に飛んできた飛行機から、港に戻るように指示されて致し方なく港に向かいました。

九 米軍の管理圏へ

港に戻った夜に、再び船頭にお金を渡して、夜陰に乗じて再度脱出を試みました。今度は風が順調に吹いていましたので、快調に進みました。

そして、まだ夜も明けない真つ暗な時間に、遠浅の海岸に着きました。そこは、米軍の管理圏内である鬱陵島うつりょうとうだったことを、後で知りました。船から下りて、遠浅の海を膝までつかりながら浜に上がりました。母が何かの手続きを行っている間、まだ暗い浜辺で一人で立っていました。慶興を出てから一人ぼっちになったのはこのときが初めてで、不安と恐ろしさに襲われてしまい、遂に大声で泣き出してしまいました。しばらくすると母が戻って来て、やっと安心しました。

収容所は浜から少し陸地に入った所で、周囲は鉄条網が張り巡らされていて、その中に小型の天

幕が一行に張られていました。そこでの印象の深いことは、最初に供された豆の料理でした。そのおいしかったことは忘れられません。生まれて初めての味であり、脱走中何日も食べていませんでしたので、余計においしく感じたのでしょうか。食べ物であんなに感激したことは、後にも先にもあるときだけです。しかし、それからは来る日も来る日も、あの感激したホースピンの缶詰が食事でした。最初はこんなにおいしいものがあつたんだと感激しても、それが毎日三食となると、そのうちに匂いをするだけで気持ちが悪くなってきました。後日、内地に帰ってからも、この豆には長い間拒否反応を示していました。

引揚船が来るまで、毎日毎日狭い天幕の中で過ごしました。予定していた引揚船が機雷に接して沈没した、などのうわさ話で持ちきりになっていました。

ノイローゼになった人もいたようで、鉄条網の外に出ようとして、監視兵に撃たれて死んだ人も

いました。今まで苦労を重ねてやっとここまで来て、もうすぐ内地に帰れるはずなのに、残念としかいえないようがありません。收容所の外では何が起きていのかと思うと、とても恐ろしくて散歩することもできなくなりました。

十 博多に上陸、母の実家へ

收容所で一カ月ぐらい生活して、いよいよ引揚船に乗る日が来ました。しかし、どうしたことかその日の情景をまったく覚えていません。引揚船は旧日本海軍の駆逐艦らしく、艦砲の台座が残っている細長い船でした。乗船してからは終日デッキにいて、航跡を一生懸命に眺めていました。寝た記憶がないので、一晩だったのでしょうか。船が静かに港内に入っていたことは記憶しています。空は曇り、港は灰色でした。陸地には陽が当たらず、暗い感じの山が眺められました。港内には、小さないろいろな形をした船が、忙しく走り回っていました。その様子を、気が抜けたようにしてデッキの手すりに寄り掛かって、飽きもせずに見

ていました。

入港して一日経ってよいよ下船となり、待ち望んだ内地の土を母と二人、しっかりと踏みしめました。埠頭のコンクリートの地面は、「内地だ！」という感じでした。それから順番にDDTの洗礼。大きな紙袋からスコップみたいなもので、シュワー！と背中に流し込まれました。そのひやつとした冷たい物が、背中からお尻を通り抜けました。爽快感がありました。何しろ、威興を出てから風呂に入っています。蚤は、もうずっと前から同居人みたいなものでした。蠅とか蚤とかに驚く子供ではありませんでした。

博多に上陸してすぐに汽車にりましたが、乗るといふより、窓から放り込まれたという方が実際でした。帰心矢のごとしの言葉のとおり、一路母の実家のある岐阜県武儀郡洞戸村を目指しました。東京の祖父の家にはずの姉たちの消息も、まだ分かりませんでした。姉たちも、私たちがどうなっているのか？ ましてや、祖父や父が死ん

でいるなどとは、想像もしていないことと思っていました。

汽車は夜中に走っていたので、外の景色などは見られませんでした。車輪とレールの軋めく音と、蒸気機関車の汽笛の音だけが耳にこびりつき、ずうっとトンネルを走り続けている感じでした。

美濃市から板取川に沿って山間を上流に向かうバスで一時間ぐらいで、洞戸村の母の実家に着きました。山の斜面に沿って桑の木が茂り、村のバス通りから少し上がった所に母の実家がありました。庭の入口に、大きな木で造った生け簀がありました。山から竹の桶を伝わって清水が生け簀に流れていて、数匹の丸々と太った鯉が泳いでいました。慶興では見たことがなく、それはすがすがしい印象でした。

ようやく我が家にたどり着いた母は、どんなにほっとしたことでしょうか。祖父や父を失いましたが、二人の死があったからこそ、二人に守られて私たちは生きて帰って来れたのです。末っ子の

私を必死になって守り抜き、こうして実家に戻ったことは、それだけでも幸いでした。母は、どんなにか祖父や父に感謝したことでしょう。

洞戸村での生活の間に、日が経つにつれて東京の祖父たちの様子が分かってきました。

中野にあった祖父関口康壽の家は、父からの仕送りが途絶えてしまったので、生活のために静岡の茶園の資産家に売って、祖父母、そして姉兄たち五人は、千葉県野田市郊外の堤根という村の農家の離れ屋に引っ越して、そこに仮住まいをしていました。

母は関口の祖父母や子供の所在を知って、ここ洞戸に呼び寄せたいと思ったようですが、しかしそれはかなわぬことでした。

洞戸村は、戦前から養蚕と和紙造りが村の産業でしたが、山間部に所在する貧しい村でした。「洞戸村字大野」という所の世帯は、ほとんど船戸姓でした。

代々船戸の家は大家族で、母も八人兄弟の末っ

子でした。当時、船戸の家は、母の次兄の慶助さんが当主になっていました。養蚕も和紙造りも営んでいましたが、昔の面影はなく、山林を多少持つているとはいえ、経済的には苦しかったようです。慶助伯父さんの後継ぎの長男は、この大戦のミッドウエー沖海戦で重巡洋艦「三隅」に乗り組んでいましたが、艦は沈められ約七百人もの戦死者を出しましたが、運良く生き残りました。しかし、その後広島島に配属になり、あの広島原爆投下の犠牲になったのでした。

身一つでようやく実家に帰った母でしたが、これから先、見知らぬ千葉の土地で家族六人を抱えて生活をしていくことは、想像するだけでも大変なことと考えたようで、せめて私一人だけでも、生活が落ち着くまで預かってもらおうということをお願いしましたが、それも事情が許さないこととなり、関口の祖父のいる野田に移ることにになり、当時東葛飾郡の梅郷村での生活が始まりました。

十一 野田梅郷での生活再建

梅郷村に移つてからの母は、それこそ苦勞の連続となりました。舅二人と十九歳から七歳までの四人の子供を抱えての疎開生活。その生活は、當時は統制品だった醬油の闇行商、上野にあるクラブでの下働き、会社の寮の賄い婦など、少しでも実入りの多い仕事を探しては自分を犠牲にして働き、送金していました。どんなときでも母は、家族にもそして他人にも優しい笑顔で接していました。逆境にあつても絶頂にあつても、母の態度は変わりませんでした。そのように懸命に生き抜いている母を見て、応援してくれる人も出てきました。

苦難の生活が続く歳月が経ち、姉二人は独立して東京に出ました。兄も東京の大学に進学し、私が高校に入る年に、母は小岩に念願の喫茶店を開きました。やっと、私と二人で一緒の生活ができるようになりました。慶興を出てから、実に七年が過ぎていました。この店でも、母は私たちのために休みも返上して働き、兄そして五歳下の私を

大学に行かせてくれました。

昭和四十年代には、四人の子供たちはそれぞれに家族を持ち、孫九人に囲まれて平穩な生活に包まれていましたが、いつも何か体を動かして働いていました。

十二 母の死

母には、心筋梗塞の持病がありました。昭和五十二年十一月二十六日、恐れていた三回目の発作を起こし、目黒区の国立第二病院に入院し、緊急の心臓手術を行いました。成功率五十パーセントと告知された手術は成功したかに思えましたが、オペレーションルームの前の廊下で待機していた私たちにも、手術室からの看護婦たちの、手術成功の笑い声が聞こえてきました。

ところが、しばらくすると事態は急変しました。母の血管が、順調に流れ出した血流の圧力に耐えられなくなつて、破裂してしまつたのです。私たちは手術室に呼ばれました。ベッドを囲んだ兄や私たちの目の前で、あの心臓への電気ショックが

儀式のように行われて、母の小さな体が飛び跳ねました。「もういい！ やめろ！」と私は心の中で叫びました。私は、母の足を何度も何度もさすり続けました。「どうか、血が戻ってきてくれ」と願いながらさすっていました。

母の足の裏の皮膚は、靴底のように堅かったのが印象に残っています。この足で、あの岐阜の山奥から今日まで歩き続けてきたのです。北朝鮮の山中を、私を背負い続け、ようやく帰国できて、醤油の瓶を詰めた重たいリュックサックを背負い、監視の目をくぐって闇行商をした足。女手一つで子供たちを育て、苦勞を支えたこの足。母の足の裏の堅い感触は、三十年経った今でも忘れることはありません。

兄史郎・明子夫婦、姉の幸子、そして私と私の長男潤たちに看取られて、明治、大正、昭和の激動の波に翻弄されながら、人のために生き、家族の幸福のため一筋に生きてきた、七十二年の波乱の生涯を終えました。祖父や父の下に、良いお土

産を持って旅立ったのでした。前の日、私と二人きりになったときに、ベッドの上から「もう十分。

思い残すことはないからね！」と私に言いましたが、これが母の私への最後の言葉でした。昭和二十年八月九日から、昭和五十二年十一月二十六日までの三十二年間の二人の旅が、私にとっては終わった日でした。

あとがき

私がこの引揚記を書くことになったのは、数奇な運命のいたずらが元でした。

兄弟の末っ子として生まれた私は、生来わがままで飽きっぽい性格でした。東京に出て来てから、都内の各地、そして横浜、川崎と転々としていて、やっと最後にこの静岡市にようやく落ち着きました。静岡市に住んで十二年が過ぎたある日、私のロシア料理店に、静岡市内在住で北朝鮮の羅津から引き揚げて来られた、福地孝さんが来店されました。そして、慶興に住んでおられたという中村登美枝（旧姓香川）さんを紹介してくれました。

香川さん一家は、なんと船戸旅館の隣に住んでおられたのです。引揚げのときは私たちよりも数倍の苦勞をしてこられ、引揚げ途中でご両親を亡くされ、弟さんと二人、孤児となつて散々な苦勞を経て、三十八度線を歩いて脱出されたそうです。

当時十九歳でしたが、途中同じように親を失った孤児たち十七人を連れて避難行をされ、引揚団の日本人たちにも見捨てられ、むしろ朝鮮の人たちの温情に随分助けられて、全員無事に日本の土を踏まれたのです。

六十年ぶりに再会した香川さんは大変に喜ばれ、是非、引揚げの苦勞記録を書くように勧められ、意を決して書くことになったのです。

北斗七星に祈る

三重県 児玉幸代

一 生い立ち

私は昭和五（一九三〇）年三月、朝鮮黄海道載寧郡新院鉄道社宅で、父母の三女として生まれました。

父は埼玉県出身で、東京の鉄道学校を出た後、朝鮮鉄道の技術屋として朝鮮に渡りました。母は小学校四年生のとき、一家で朝鮮全羅南道光州の近くの、松汀里に移り住んだそうです。というのは、母方の祖父が、若いころから広い土地で思い切り百姓がしたいという夢を持った人で、年金が下りるとすぐにそれまで勤めていた官職を辞して、妻子には年金を渡し、自分は退職金を手にして、一人で朝鮮に渡つたのだそうです。三年ぐらいは音信不通で、村では虎にでも食われたのだらうとうわさしていたそうですが、その後、「見通しがつ